

英語教育から考えられること

松藤みどり

I. 筑波技術短期大学の英語のカリキュラム

一般教育科目等の中の外国語科目として第1学年で履修する英語Ⅰ、第2学年で履修する英語Ⅱがあり、各学科、専攻ともに80分授業、週2回、通年3単位を取得する。

この他に専門教育科目として、電子情報学科電子工学専攻では技術英語Ⅰ（第2学年で履修、週1回、通年3単位）、技術英語Ⅱ（第3学年で履修、週1回、通年3単位）、情報工学専攻では技術英語（第3学年で履修、週1回、通年3単位）を履修し、それぞれ専門教育担当者が指導する。

外国語科目としての英語

英語Ⅰ

基礎的な英語力の要請を目標として、講読と表現の学習を行う。講読では、国際理解、科学技術、障害者の生き方に関する題材を扱い、表現では、身近なことを英語で書き表すこと及び言い表すことを指導する。（松藤・山内）

英語Ⅱ

「英語Ⅰ」に引き続き、文芸、科学技術にかかわる題材を広く取り上げ、英語講読及び英語表現の力を養う。あわせて、各専門課程で用いる科学・工業・技術英語の基礎となる事項を指導する。（須藤・山内）

II. 平成6年度筆者担当の英語Ⅰの授業

平成6年度一学期はディーリ先生、二学期の初めの6週間は山内先生（非常勤講師）が担当し、10月から松藤があとを引き継いだ。

中心となる「講読」用に大学生向きの平易なテキストを選び、2回で1課の割合で読み進んだ。2学期末（11月半ば）に「1学期に学習した英語の手話を引き続き教えて欲しい」との申し出があり、学生の大半が望んだので、3学期（12月から）は初めの20分程度を英語の手話に充て、

「講読」は残りの20分で行うように変更した。学生の学習状況を把握し、授業に対する評価を知るために、年度末にアンケート調査を行った。アンケートの内容を資料1に、結果を資料2に示す。

アンケートの結果から、テキストはおもしろかったが、約半数の学生にとって難しく、進度が早すぎると感じられていること。文法事項の説明が不足であるとの指摘が多く、主として低学力の学生からの訴えであったこと。半数近くの学生が予習をせずに授業に臨んでいること等がわかった。

手話の授業は多数の学生がよかったと評価しており、20分程度が適当であると判断できた。

III. 平成7年度の英語Ⅰの授業

1. 基本方針

7年度は一学期から手話の基本を学習させ、二学期は自己表現や会話もできるように計画した。「講読」は前年度と同一教材を用いるが、進度を遅め、文法の指導に力を入れるよう方針を変更した。

2. 新入生の学力の分布

入学時点での個人および学科ごとの学力を把握するために、最初の授業で学力テストを行い、あわせて使用教科書と英検取得状況を調査した。

学力テストは新入生51名（建築工学11名、他は各10名）の他、未履修の上級生がデザイン学科1名、建築工学科2名、電子工学専攻1名がおり、計55名が受けた。学科で分けた得点分布を散布図で次ページに示す。

散布図から言える学科（グループ）の特色：

○デザイン：最下位の成績が良く、グループ内の学力が接近している。

×機械工学：上位3名と下位7名に分かれている。

資料1. 英語 I 授業についてのアンケート

10月半ばから1年生の皆さんの英語を担当してきましたが、今日が最終日になりました。来年度4月から担当する新1年生の授業の参考にするための資料作りにご協力下さい。選択肢を○で囲むか、指示に従って記述して下さい。全員提出して下さい。

学科(専攻) _____ 氏名 _____

I. テキストを使った授業について

1. 使用したテキスト My Japanese Diary の内容はおもしろかったですか。
(a)とてもおもしろかった (b)普通 (c)つまらなかった
2. 一つの課に知らない単語がおよそ何語位ありましたか。
(a)30以上 (b)29~20位 (c)19~10位 (d)10以下
3. 授業の予習はどのようにしていましたか。ほとんどいつもしていたことに◎、ときどきしたことに○、たまにしたことに△、一度もしなかったことに×を書きなさい。
(a)本文をノートに写す ()
(b)新出語の意味を調べる ()
(c)本文を通読して意味を考える ()
(d)本文を和訳する ()
(e)Comprehension や idioms を前もって解答しておく ()
4. テキストの進捗はどうでしたか
(a)早すぎる(一回に進む量が多い)
(b)ちょうどよい
(c)遅い(一回に進む量が少ない)
5. テキストの難しさはどうでしたか
(a)難しかった
(b)適当である
(c)簡単だった
6. 授業中の先生の話はどの程度理解できましたか。(c)、(d)に○をつけた人は、その理由も書いて下さい。
(a)よくわかった (b)だいたいわかった
(c)わからないことが多かった (d)ほとんどわからなかった
理由 [_____]
7. 次の各項目について先生の説明や指導は充分でしたか。不十分な場合は、どのような点が不足していて、どうして欲しかったか、具体的に書いて下さい。
(1)単語の意味や発音
(a)充分 (b)普通 (c)不足 [_____]
(2)文法事項
(a)充分 (b)普通 (c)不足 [_____]
(3)テキストの内容や文化的背景
(a)充分 (b)普通 (c)不足 [_____]

II. 手話の授業について

1. 3学期からアメリカの手話の指導をしましたが、採り入れてよかったですか。
(a)手話の指導があってよかった
(b)手話はあってもなくてもよい
(c)英語の授業で手話を指導する必要はない
2. 毎時間20分程度でしたが、時間についてはどうですか
(a)もっと長いほうがよい ()分位
(b)適当である
(c)もっと短いほうがよい ()分位
(d)なくてよい

III. 英語の授業全体について意見があったら何でも書いて下さい

資料2. 平成6年度3学期アンケート調査
55名中47名提出。回収率85%

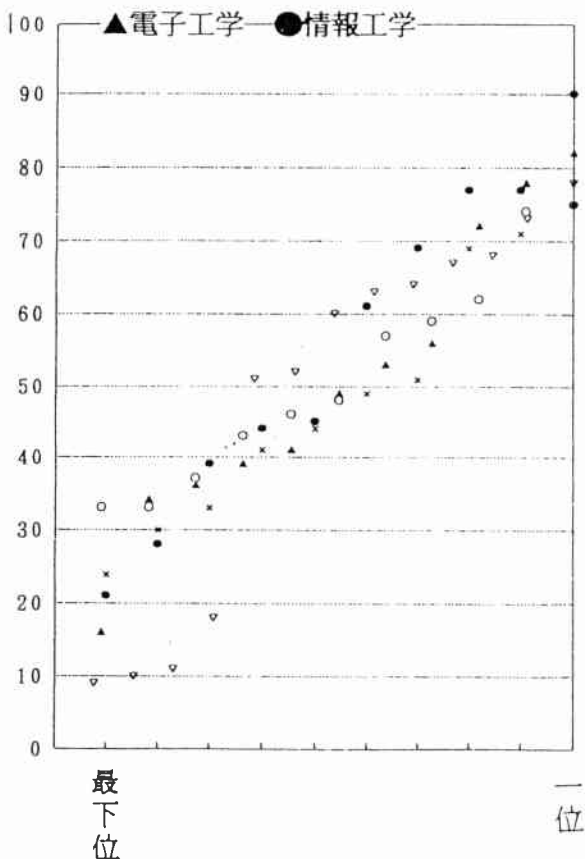
- I. 1(a)12 (b)34 (c)1
2(a)15 (b)8 (c)23 (d)1
3(a)◎ 8 ○ 8 △ 7 × 24
(b)◎ 4 ○ 6 △ 15 × 22
(c)◎ 6 ○ 13 △ 11 × 17
(d)◎ 6 ○ 7 △ 12 × 22
(e)◎ 5 ○ 2 △ 10 × 29
4(a)23 (b)22 (c) 2
5(a)20 (b)26 (c) 1
6(a)12 (b)32 (c) 2 (d) 1
7(1)X(a)12 (b)32 (c) 3
(2)X(a) 8 (b)31 (c) 8
(3)X(a)14 (b)33 (c) 0
II. 1(a)40 (b) 6 (c) 1
2(a)12 (b)32 (c) 2 (d) 4

資料4. 平成7年度1学期アンケート調査
55名中49名提出。回収率89%

- I. 1(a)18 (b)29 (c) 2
2(a)16 (b)10 (c)19 (d) 4
3(a)◎ 19 ○ 8 △ 7 × 17
(b)◎ 12 ○ 18 △ 13 × 6
(c)◎ 5 ○ 16 △ 17 × 11
(d)◎ 12 ○ 13 △ 15 × 9
(e)◎ 6 ○ 8 △ 11 × 24
4(a)18 (b)29 (c) 2
5(a)11 (b)35 (c) 2
6(a)17 (b)27 (c) 4 (d) 1
7(1)X(a)10 (b)33 (c) 6
(2)X(a) 9 (b)32 (c) 8
(3)X(a)13 (b)36 (c) 0
II. 1(a)40 (b) 6 (c) 3
2(a)11 (b)35 (c) 1 (d) 2

資料3. 英語学力テスト結果散布図

得点 ○デザイン ×機械工学 ▽建築工学



▽建築工学：上位9名がまとまって力があり、残りの4名（上級生2名を含む）が非常に低い。

▲電子工学：上位3名と下位1名が離れている。

●情報工学：上位5名と下位5名にやや開きがある。

3. 高校までの学習ベース

使用教科書の調査では、普通校出身の22名のうち19名、国立聾学校出身の16名の内14名が英語Ⅱを全部または途中まで履修しているのに対し、公立聾学校出身者は英語Ⅰまで（途中を含む、以下同様）5名、中3まで8名、中2まで1名であり、英語Ⅱを履修した者は3名にすぎなかった。

中2までと回答した者はテストは9点で最下位であった。テストの内容が英語Ⅰ終了程度のレベルであったので、得点できなかったものと思われる。中3までしか履修していない学生でも英検3級まで取得している学生は、健闘した。

4. 授業計画

前年度の学生のアンケート結果、および本年

度の履修学生の調査結果から、本年度の授業を次のように計画し、実行した。

テキストに入る前に新聞記事（アメリカで発行されているSILENT NEWS より、Deaf suffer in aftermath of Japan earthquake）を取りあげ、難しい語彙や表現を含む文から情報を収集することを学ばせ、阪神大震災で聾者がどのような活動をしたかを、関西出身の学生の体験談も交えて知ることによって、障害者の生き方を考えさせる。

テキストは3回で1課を進むようペースを落とした。さらに1課ごとに単語のテストを行い、得点を学期末試験に加算することにした。

手話は一学期に基礎を習得し、二学期に自己表現や会話ができることを目標に、毎時間20分を充てることにした。

5. 学生の学習状況と授業に対する評価

一学期の終わりに昨年度と同じ内容のアンケート調査を行った。結果を前ページに示す。

前回の調査と比較して、内容がおもしろいという学生が若干増加し、進度が早すぎる、テキストが難しいと答えた学生が減少した。予習状況が良くなって来ているが、練習問題の予習はしない学生がまだ多い。教師の指導については、文法事項の説明の不足を指摘する学生が未だに多く反省させられた。具体的に、例文を挙げて欲しい、練習問題を増やして欲しい、本文に入る前に文法の説明をして欲しい、訳す前に説明が欲しいなどの要望があった。単語については、発音をきちんとできるように指導して欲しい。教師が用意する単語カード（単語、発音、意味を三つ折りの紙に書いたもの）の提示時間が短く、書き取る暇がないなどの指摘があった。

手話については、概ね好評であったが、「なくてよい」が3名いた。

IV. まとめ

本学の学生は、入学以前の学習経験に大きな差があるため、どのレベルの学生に照準を合わせて授業をするかは、難しい問題である。「短

大」であるからには、聾学校の高等部よりは高度なことをやるべきだと思うが、どの学科にも授業内容を理解するだけの基礎力を持たない低学力の学生がいる。その低学力は本人だけの責任とは言いきれない。しかもその学生はもっとわかるようになりたいという意欲は持っているのである。

昨年度は「本文をOHPで提示すること」「知らなそうな単語を選びだし、発音記号とカタカナで発音も示し、意味も示すこと」および「本文の訳を全部黒板に書くこと」を聾学校の延長でやっていたが、今年度は、さらに、「1課ごとに単語のテストを実施する」「文法事項をとりあげて時間をかけて説明し、練習問題をやらせて理解を確かめる」などもとり入れた。

単語カードを用意したのは、予習が期待できないので、当てられた学生がその場で辞書を引くという時間の無駄を省くためであったが、学生は、カード提示する時間が短いので書き取れないという不満を持っていたことがわかった。テキストの内容や文化的背景について説明が不足していると回答した学生はいなかったが、それは、訳を全部黒板に書くのを見て、満足しているだけなのかもしれない。予習の状況が昨年度より良くなってきたのは、単語のテストをするようになったことと関係があるように思われる。

これらのことから、本学の学生の姿勢は、かなり受け身であるということがわかる。聾学校からの入学者が年々増加している状況から見ても、本学においては、聾学校、あるいは普通高校で習得しそびれた内容を確実に身につけさせるのが英語Iの使命であると考えられる。

また、NTIDやギャロデット大学の学生との交流の機会や、自主的に海外旅行をする機会もあるので、実用的な英語の表現力を養う必要性も感じられる。英語の手話はその一つの手段である。